発行日2021年2月20日

ほぞん通信 第5号

発 行 人　ＮＰＯ法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会　代表　前田享史
お問合せ　080-6637-1950
Ｅメール　info@tatemono-hozon.net

龍ケ崎を歴史で盛り上げよう！！

龍ケ崎は鎌倉時代に下河辺氏が最初にまちづくりを行い、戦国時代は土岐氏、江戸時代は伊達氏へと引き継がれた歴史があります。しかし、それを物語る歴史的建造物や城跡などの史跡の多くが失われています。このことは過去の龍ケ崎市民が龍ケ崎の歴史を置き去りにしたからだと思います。失われたものは仕方ありません。今残っているものだけでも次世代に繋ぎたい。そのためにも、龍ケ崎を歴史によるまちづくりで盛り上げたいと考えます。

龍ケ崎まちづくり・つなぐネットに登録

当会は市の制度、龍ケ崎まちづくり・つなぐネットに「旧竹内農場西洋館ほか若柴宿や市街地の歴史的建造物を含む歴史散歩の案内」をする団体として登録させていただきました。

歴史散歩の案内は、歴史によるまちづくりを考える第一歩で、将来は、旧竹内農場西洋館や筑波庵など龍ケ崎に残る歴史的建造物を、国の制度の「歴史まちづくり法」適用を提唱し、大きな枠組みでの保存活用を視野に入れた活動を考えております。

赤レンガ西洋館ほか女化歴史探訪

龍ケ崎まちづくり・つなぐネットを活用した第一例目として、2020年10月29日（木）に開催の八原まちづくり協議会主催「赤レンガ西洋館ほか女化歴史探訪」の案内をする団体として協力しました。

参加者は協力団体である当会及び市民活動センタースタッフを含め30名。NPOの代表前田が案内役を務め、女化神社、女化稲荷奥の院、登録有形文化財旧岡田小学校女化分校、竹内農場赤レンガ西洋館、明治天皇駐蹕之碑記念公園と、龍ケ崎市と牛久市に跨る女化地区を資料片手に3時間ほど楽しく見て回りました。

女化神社では、この一角が龍ケ崎市馴馬町で飛び地である由縁や狐伝説について、旧岡田小学校女化分校は女化開拓民の心のよりどころであったこと、竹内農場赤レンガ西洋館では普段入ることの出来ない建物内部も見学、東京駅と同じ上敷免製レンガ（渋沢栄一が設立発起人の日本煉瓦製造製）で作られていることや、竹内明太郎（コマツ創業者）という偉大な実業家が龍ケ崎に関係していたことなど詳しく説明しました。

前田享史

ハウジングアンドコミュニティ財団主催「住まいとコミュニティづくり活動セミナー」にZOOM出演

2020年8月29日(土)ハウジングアンドコミュニティ財団主催「住まいとコミュニティづくり活動助成事業成果発表会＆まちづくりNPO交流の集い」にZOOMにて参加し、1年間の冊子制作活動及び今後の課題と計画を８分間に纏めお話ししました。これで今回の助成事業に関連したイベントの総てが終わったと思っていたら、一か月後、財団からのメールで、新年度の助成応募に向けて開催の「住まいとコミュニティづくり活動セミナー」を開催するので、昨年度の活動例として20分間のスピーチを依頼されました。もちろんお受けしましたが、開催間近に届いたチラシをみてびっくり。2019年度の21助成団体を代表してスピーチすることになったのです。この助成金は受かることが難しいと言われているなかで、さらにこうしたセミナーに代表してスピーチする事は大変光栄に思いました。

そして、セミナーは11月25日、時節柄ZOOMで開催されました。その第一部「私たちは助成事業をこう活用した・・・」。当会のテーマは、「 地域の宝、竹内農場西洋館の保存に向けた冊子の作成活動」で、次のことをお話ししました。

竹内農場西洋館や竹内明太郎について、そして昨年1年間の冊子作成活動について。また、今後の抱負やこの助成金による効果についてたくさんの事をお話しする事が出来ました。

今回の助成事業の成功により、当会は資金面だけでなく、人脈、ネットワーク、ステータス といった大きなものを得ることが出来ました。

ハウジングアンドコミュニティ財団様有難うございました。

前田享史

西洋館冊子6千部刊行とその反響について

ハウジングアンドコミュニティ財団の助成事業として制作していた『竹内明太郎が残したもの～龍ケ崎の赤レンガ西洋館』が完成し、令和2年3月30日に発行しました。市内の歴史民俗資料館、市民活動センター、各コミュニティセンター等の公共施設や牛久市の各生涯学習センター、市内外の喫茶店、市外のギャラリー、観光協会など計49か所に配布しました。

おかげさまで、読んだ方々には冊子の装丁が素晴らしい。プロの仕事のようだ。」「分かりやすい文章なので、大変読みやすい」など好評で、あちこちから補充の依頼があり、すでに約5千部が配布されました。残りは保存し、イベントなどの開催時に活用する予定です。

冊子を読んだ方々からの反響の数々をご紹介します。

「大変読み応えのある内容ですね。写真や図面など盛りだくさんで、しかも美しい仕上がりに圧倒されました。」

「竹内明太郎のことを知り、鳥肌が立ちました。渋沢栄一のような方だったのですね。NHKのドラマにでも竹内明太郎を取り上げて欲しいですね。」

「とても分かりやすい文章で竹内綱と明太郎の功績に感動しました。飛鳥山公園を手掛けた長岡安平や日産自動車の前身であるダットサンに明太郎が関わっていたことなど息子に教えてあげたいと思いました。昔の実業家は全財産を投入して、市民のためになることを優先するという人が多かったように思います。」

「竹内明太郎氏の存在は、この資料で初めて知り、事業家の生き方、考え方の一旦を垣間見ることができました。武士の精神を根底に、明治維新における西洋化の流れを大正期に至るまで、私財を投じて見事に事業化、実践した素晴らしい人だったのですね。意気揚々と事業に邁進したことは、さぞかし人生を謳歌したことでしょう。大震災、経済恐慌、敗戦を経ても、なお小松製作所、早稲田大学、高知工業高校等は現存している遺産もあれば、NPOが取り組んだ廃墟化した建造物等の遺産も各所に存在する。何よりも、師の精神が直接、間接にかかわった人々の心に脈々と流れている。素晴らしいですね！できれば、長岡安平師設計の庭園が設計どおり造成されて、公園とか庭園として現存していれば最高でしたね。」

「私は竹内明太郎という方を知らず、そんな方が日本の発展に尽力されていたのだと学ばせていただきました。倒産で、そうした偉業が引き継がれなかったのですね。残念なことです。でも、皆さんのお働きで、まず、地元からその存在が再評価されるのではないかと思っています。龍ケ崎の赤レンガ西洋館の歴史や見事さに、各地に宝が眠っているものだと感心いたしました。渋沢栄一のレンガを使い、庭は長岡安平・・・・それだけでも見てみたくなります。」

島村宏之

松戸 岩瀬自治会フォーラムにて西洋館の竹内明太郎を語る

12月5日(土)18時から松戸の岩瀬自治会館にて、「竹内明太郎を知る～龍ケ崎の赤レンガ西洋館から」と題して前田理事長が講演しました。出席者は全体で15名でした。

はじめに、島村副理事長が龍ケ崎市と松戸市のつながりについて話し、藪の中の西洋館と現在の西洋館との対比を市民のインタビューをまじえて紹介しました。

次に前田理事長による講演が約1時間ありました。平成3年に藪をかき分けて初めて西洋館内部に入った時は正に心霊スポット。私の秘密基地の如く感じられ、まるで映画のワンシーンのようだったそうです。竹内農場の目的は茨城無煙炭鉱への食糧供給であったと書きましたが、ほんとうのところはまだ、明らかになっていません。（今後、改訂版発行までには明らかになるかも・・・）竹内明太郎の人間性に惚れた話としては炭鉱夫への礼儀正しさや手厚い待遇を例に挙げて説明しています。今回は時間的に余裕があるので、ゆったりと明太郎への愛情たっぷりに話していました。

質問応答では、今、話題の渋沢栄一との接点はあったのかとの質問があり、父の竹内綱が日本統治前の朝鮮・京釜鉄道の発起人として渋沢とともに名を連ねていたことを紹介しました。また、龍ケ崎にゴルフに来るご主人が牛久市にある「みずほの村市場」でお土産に買ってくる『女化太巻き』が女化にちなんで油揚げが具材に入っていて大変美味しいとの話がありましたが、我々、地元の人間も知らないことなので、びっくり。調べてみると2年前にできた人気商品だそうです。

岩瀬自治会の鈴木前会長からは「二人の情熱が凄い。冊子の調査が行き届いている。」とお褒めの言葉をいただきました。松戸市内のインターネットラジオ・ポアロから前田理事長に出演依頼がありました。

島村宏之

比較住宅都市研究会のシンポジウムを共催により開催

比較住宅都市研究会主宰　海老塚良吉

12月18日（金）午後1時半から龍ヶ崎市の市民活動センターでシンポジウムを開催して、歴史的町並みを生かしたまちづくり―蔵のまち川越の経験からについて、荒牧澄多氏（NPO法人川越蔵の会理事、NPO法人全国町並み保存連盟常任理事、元川越市職員）にお話しいただきました。開催要旨：川越は蔵造りの町並みを活かした観光で成功したまちとして知られている。しかし、これは望んでいたことであろうか？　1970年代、蔵造りの町並みを擁する一番街商店街では、デパートや銀行の移転に伴い、寂れ行く一方であった。しかし、その町並みの歴史的価値については、専門家を中心に広く認識されていた。保存か商売か。その中から、歴史的資産を活かした商店街再生へと歩み出していく。その結果、重要伝統的建造物群保存地区に選定され文化財として守られるとともに、多くの観光客を集めるようになった。この町の軌跡と課題を紹介し、龍ケ崎市ではどのような活動ができるか議論する。

「私は、1956年川越市生まれ。1979年東京都立大学（歴史）卒業、81年同大大学院修士課程修了。同年川越市役所入庁。在職中は、公共建築の設計・監理のほか、蔵造り商家の調査、伝統的建造物群保存地区、景観計画、歴史的風致維持向上計画等に携わる。博物館では、蔵造りの町並み模型の設計のほか、第44回企画展「蔵・倉・くら―蔵造りと川越の町並みを知ろう―」を担当。NPO法人川越蔵の会、NPO法人全国町並み保存連盟等の会員。

川越市の人口は35万人、川越祭りは、コミュニティを熟成するのに有効で、90万人が集まる。川越はインバウンドの外国人が1、2時間観光する。旧城下町が伝建地区となっているが本川越駅から1㎞離れている。川越駅周辺が現在の商店街として繁栄している。明治26年の大火で中心商店街の6割が消失。蔵造りの町並みが成立。71年に大沢家住宅が重要文化財指定、この家は当時はボロボロな店で看板などに覆われていた。75年伝統的建造物群保存地区制度に指定されるとくぎさえ打てなくなると商店主は指定に反対する。81年蔵造り商家が、市の指定文化財（住宅系のみ25件）、83年川越蔵の会発足、住民が主体となったまちづくり、北部商店街活性化による景観保存、86年一番街活性化モデル事業、87年一番街商店街町並み委員会、川越町並み委員会、4自治会、商店街、構成は住民、専門家、行政。町づくり規範、89年景観条例、92年一番街電線の地中化、行政による都市計画変更案が提示されたが白紙撤回。93年十カ町会発足、多数の蔵の会会員が委員となる。住民自身による合意形成、98年伝建地区保存条例、地元の建築事務所が取り組む。2001年、明治43年に建築の川越織物市場が解体され、中高層建築の予定、市民の反対運動、市が土地建物を購入する。旧鏡山酒造もマンションが建設予定であったのが住民運動で市が購入する。

後藤治著「伝統を今の形に」に川越と土浦を比較、土浦の大徳呉服店、野村砂糖店など伝統的建築物群があったが訪問者が少なく失われる。草加市では曳家をして残した民家が使われていない。越谷市の蔵の再生、はかり屋は取り壊して建売住宅となる予定だったが、再生しようと地元のハウスメーカーの社長が決断し、複合商業施設になる。」

質疑討論では、龍ケ崎市では、登録有形文化財の小野瀬家が競売に出された際に、市民の要望が出されたのに市は購入をしなかった、歴史的な建築物に高齢者が居住していたり、空き家となっているが活用が進んでいない、川越では市が建物を購入しても利用が十分できなかったケースもあり、民間所有のままで若者が活用している空き店舗がある、川越祭りは、多くの市民が集まり、街への求心力が高まる、戦後、各町会が祭りに加わり山車を作成した、ターニングポイントとなったのは伝建地区の南側に計画されたマンション反対運動で、建築指導課が地元の反対運動を受けて、対応に悩んだ、松戸の人が龍ケ崎の神社を回って彫刻の見事なことを指摘してくれたが市民が気づいていない、歴史的建造物の知識をまちづくり活動にまでつなげる必要がある、龍ケ崎の地域資源を書いた手作りマップを作成しているが、情報が住民に知られていない、市にこれらの情報を伝えて地図を作成してもらう必要がある、川越の空き店舗活用は若者が8人で取り組みを1年間続けて、一人の若者が頑張りその後も利用を続けているケールがあるなどが議論されました。

（参加者21名）

高松商店石蔵資料展開催に向けて

龍ケ崎市内新町に、古い石蔵が遺されているのをご存知でしょうか。

昭和8年（1933）建造の築86年という大谷石の石蔵がひっそりと、敷地の片隅に佇んでいる。

この石蔵は、この地で砂糖問屋を営んできた高松商店の当主高松彰一郎氏が建造した石蔵で、大谷石をふんだんに取り入れて贅を尽くした石蔵となっている。

本来なら石蔵がある敷地には、隆盛を誇った高松商店の建屋が遺されているはずが、2011年3月11日、東日本大震災で大きな被害を受け、危険が伴うということで残念ながら取り壊されている。

尚、高松商店は2011年3月の段階で既に閉店しており、現在は龍ケ崎市商工会所有となっていて、NPO法人竜ヶ崎駅前コムハウスがイベント等で活用している。

この高松家の石蔵の二階を何とか活用しようということで2013年初夏のころから一時的に市民有志で二階部分の清掃活動をはじめた。

当時開かずの二階部分を開けたところ、高松家の教養の高さを伺わせる様々な品物が発見された。

中でもとりわけ珍しい部類に入るのではないかというものに大正元年（1912）9月発行の「時事新報」（福沢諭吉創設の新聞社）原本が発見された事ではないだろうか。

明治天皇崩御に際し、当時時事新報社が明治天皇崩御を悼み写真集を発刊した記事が掲載されている。

市民有志での活動はほどなくして諸般の事情により終了となったが、当会はその後2020年暮れ頃から、本格的に市民の方々に向けて、これを含めた他に残されている高松商店にまつわる品々を展示公開しようと、現在は企画立案及び現地での状況確認など行っている。

高松家は龍ケ崎市内でも大きな砂糖問屋として財を成し、一時代を築き上げた。また、アンパンの木村屋でお馴染みの木村家（龍ケ崎市川原代）とも婚姻関係にあり、いかに当時商売人同士の繋がりも強かったかが伺える。

しかしながら、昭和37年（1963）には粗糖の輸入自由化などが行われた事もあり、次第に経営に陰りが見え始め、菓子店経営やその他いくつかの商売に鞍替えしながら凌ぐも、残念ながら平成に入るころには店を完全に閉店したと聞いている。

1970年当時まだ沖縄返還前、高松商店が実際にこの商品を龍ケ崎の店舗で販売していたかは調べがついていない段階ではあるが、当時はパイナップルの輸入自由化前夜という時代ではなかったかと推測される。

高松商店がどのような商品を扱っていたかも、これから調べてみたいところ。

建屋は取り壊され更地にされたものの、非常に屈強な大谷石の石蔵は取り壊す費用などもありそのまま土地片隅に取り残された。

現在この石蔵は普段は施錠され、特に二階は気軽に見学出来ない状態ではあるが、開催時期は今のところ未定で、高松家の資料を中心に、そのほか昭和の頃の龍ケ崎市の商業の発展を支えた商家の資料を集め、展示会の開催を目指している。

田中加代

編集後記

昨年の3月から世界中が新型コロナ渦に巻き込まれ龍ケ崎市においても公共施設の閉館などがあり、当会は充分な活動が出来ない状態となりました。

そのような状況下、3月刊行の竹内農場西洋館竣工100周年記念冊子「竹内明太郎が残したもの～龍ケ崎の赤レンガ西洋館」6,000冊の無料配布は順調に作業が進み、残り1,000冊となりました。今後のイベント等の配布用に残すため、1部の公共施設を除き配布を終了させていただきます。

また、当誌「ほぞん通信」においても、編集会議がまなならない状態で、1年ぶりの発行となりました。多岐にわたる当会の活動に目を向けていただければありがたいです。

編集長　前田享史

https://tatemono-hozon.net/

NPO建物保存会